

亡き人の ために手向けし念仏は
生きるわが身の 教えなりけり

令和八年五月二十一日（木）午後一時より施餓鬼会を執り行いました。この日は雨となりましたが、たくさんのご参詣をいただき誠にありがとうございました。初施餓鬼をお迎えになるご家庭にとっては、特別な想いがあったことだと思えます。亡き人へのご回向のお念仏によって、普段はあまり足を止めて考えないようなこともふとした時に考えさせていただく。それが即ち、私たちの指標となるものにいつしか繋がっていく。つまりは、教えとなっていた。というものでないでしょうか。



源昌寺通信

木漏れ日

第8号

発行元：浄土宗 源昌寺
令和8年7月発行

智者のふるまいを
ぜずして
ただ一向に念仏すべし

令和8年4月25日 御忌会 勤修

法然上人を偲ぶ年忌法要 ～御忌法要～

非情 ごと

厳しい判断を下したとき、「非情な人だ」「非情な決断だ」といった言葉が使われることがあります。また、困っている人を見てても手を差し伸べない人に對して、「あの人は非情だ」と評することもあるでしょう。

実は、この「非情」という言葉、元々は仏教語とされています。仏教において、人間や動物のように心を持つものを「有情」と呼ぶのに対して、草木や山川、大地などの心を持たない存在を「非情」と言います。このように本来は、ただシンプルに「感情や意識を持たない自然物や物質」という意味でしたが、この「心がない」という側面が、時代を経る中で「思いやりがなく、冷たい様子」へと意味合いが変化していったとされています。

浄土宗新聞7月号より抜粋

源昌寺ホームページ

源昌寺では、平成25年よりホームページを作成しています。こちらもぜひご覧ください。



法然上人 御影

「お念仏を唱えれば、誰もが極楽浄土に往生できる」この教えを掲げ浄土宗を開き、生涯をかけて説きひろめられた法然上人のご遺徳を偲ぶ年忌法要を「御忌会（ぎよきえ）」といいます。「御忌」という言葉は、もともと天皇家や摂関家などの貴人や祖師・高僧の年忌法要の尊称として用いられていました。一五二四年、後柏原天皇が「法然上人の忌日に、七日間の御忌法要を勤めよ」と、総本山知恩院に詔勅を下されました。爾来、「御忌」は法然上人の年忌法要として定着し、全国の浄土宗の寺院で広く勤められるようになりました。明治時代に知恩院が日程を四月に変更してからは、他の大本山や一般寺院でも一月二十五日のご命日とは時期を異にして勤めるところも多くなっています。法然上人は、「念仏の声するところすべてが私の遺跡である」との言葉を遺されています。私たちがそれぞれが極楽への往生を願い一心にお念仏をとなえること、それがそのまま上人への報恩になるのです。

少ないながらも力強いお唱え 詠唱大会出場



令和八年三月五日、嬉野市塩田町のリパティにて佐賀教区詠唱大会が開催され、源昌寺支部も出場しました。浄土宗における「詠唱（えいしょう）」とは、仏教の教えや仏の徳をたたえる歌に節（メロディー）をつけた吉水流（よしみずりゅう）詠唱のことを指します。法然上人の教えを広めるための「お念仏の助業」として位置づけられ、和讃（わさん）、御詠歌（ごえいか）、舞で構成されています。佐賀教区のみならず、全国的にも講員（詠唱を唱える人）が段々少なくなっています。教えを継ぎ続けるためにも皆さんのご加入を心よりお待ちしております。入りたいと思われる方はお寺までお電話ください。

住職コラム

今を生きる私たちの「終活」

長雨が明け、本格的な夏がやってまいりました。去る7月6日（月）、佐賀教区で開催された研修会に赴いてまいりました。今回のテーマは、昨今関心が高まっている「終活」です。講義のなかで特に深く考えさせられたのは、亡くなった後の葬儀や遺品整理、諸手続きを第三者に託す「死後事務委任」という具体的な仕組みについてでした。私たち浄土宗の念仏者は、この世の命を終えたとき、阿弥陀さまのお迎えをいただき、お念仏とともに極楽浄土へと往生させていただき、還るべき場所があるという安心は、私たちの支えです。しかし、残された現世の「お片付け」は、後に残る大切な家族や周囲の方々が担うことになります。だからこそ、心身ともに健康で判断力がしっかりしている「生きている今」のうちに、自らの人生の後始末を整えておく必要があるのです。「終活」とは、人生の終わりを待つ後ろ向きな作業ではありません。残される方々が戸惑いや負担に迷わぬよう、今できる最善の配慮をしておくという、前向きな「思いやりの智慧」であります。来月はお盆を迎えます。ご先祖さまに手を合わせるとともに、ご自身のこれからの歩みと、その先の「安心」について、一度考えてみてはどうでしょうか。皆さまがこれからの日々をより心豊かに、安心して歩んでいけるよう、お寺も共に考えてまいります。気がかりなことがございましたら、どうぞ、いつでもお気軽にご相談ください。